論壇

空中・海中・地中を行く

真鍋　博
イラストレーター

Going into the Air、the Sea and the Earth

Hiroshi MANABE
Illustrator

ヒト・モノ・カネ、世の中で最も関心のもたれる三大情報である。

このうち、カネは電気通信でも送れるが、ヒトも、モノも、交通輸送手段なしには動かない。カネも、銀行などは現金輸送車で運んでいる。

電脳化とか、高度情報化とかと言われると、情報が電波で宙を飛びかっているように思いがちだが、新聞や週刊誌、ビデオテープやレーザーディスクも、トラックや航空機で送られている。テレビは速報性はあるものの、確認や記録性に弱い。だから〝テレビ離れ〟という言葉はあっても〝新聞離れ〟や〝雑誌離れ〟という言われ方はしない。

わたしのやっているイラストレーションも、印刷という古典的伝達手段でありながら、マスメディアの一翼たりうるのは、印刷物が、翌日には全国に運ばれ、人の目にふれるからである。つまり、輸送は、フィジカル・コミュニケーションメディアなのである。

最近、各自治体が、文化行政の目玉としてつくる博物館や劇場などの館長に、文化人や女優などの有名人が就任するケースが多くなったが、東京で本業の仕事をしながら兼務できるのは、航空機の増便や、鉄道のスピードアップのもたらしたものである。ヒト情報、いや、才能や人柄も輸送されている。

だが、飛行機にしても、新幹線にしても、ここ数十年、変っていない。先日、NHKラジオで、牧伸二がウクレレ漫談をやっていて、「二十何年たっても新幹線とは、やんなっちゃった。女なら24にもなれば、もうおばん」と歌っていた。男性でも政治家なら六十何歳でニューリーダーなのだから、女性の年齢にたとえるのはいささか失礼というものだろうが、とにかく交通手段は、本数がふえ、速度が増したものの、40年１日の姿といえなくもない。

国土が列島で、その一割しか平地がなく、しかも超過密で、新空港も、新鉄道もままならなかったからだが、〝地価高騰〟が発想の転換をさせはじめた。いや、行政も民間も、せざるをえなかったのである。

その一つが、深度地下利用。地下鉄や倉庫、パイプライン、いや地下都市も構想されている。が、この地下なる言葉、イメージが良くない。地下とは「隠す」「埋める」という先入観があり、人目にふれて困るものを、隠蔽するという印象もある。1,000メートルにもわたって開発利用するには、地下という言葉もあまりに貧困で、〝第三のフロンティア〟としての地中開発というべきだろう。

オリエントエキスプレスで東京―ワシントン間を数時間で結ぼうというのも、造波抵抗の少ない海中を超電導で走らせるというのも、従来の地上・海上・地下という発想を超え、宇宙・地中・海中を交通輸送のルートに拓こうという発想と挑戦と技術開発である。

もともと通信は、交通輸送のためにはじまった。逓信という言葉のとおり、情報が移動に不可欠のものであった。

エア・シー・ランドにおける数々のニューフロンティア構想のなかで、逓と信が再び結びつこうとしている。交通輸送手段そのものが、即情報体として、何よりも、人間の欲望と夢を、未開のルートに乗せようとしはじめたのである。

原稿受理　1989年１月６日